

日本テスト学会第19回大会 公開シンポジウム
大学入試の「英語」はどこに向かうのか

大津起夫先生、渡部良典先生の
ご発表をうけて

阿部公彦（東京大学）

「アクセント問題の廃止」に発する諸問題 (大津先生 p.12～)

◆「実際のコミュニケーション」に即した問題にするという考えについて。

1. 日本語話者の英語オーラル・コミュニケーションの最大の関門の一つは「ストレス・アクセント」(の運動感覚)。「実際のコミュニケーション」にこだわるあまり、この障害に焦点を絞る機会を逸するのは得策ではないのでは？少なくともテストでの出題機会はなくなるのでは？
(＊渡部先生の音声によるテストという提案も考慮できる？)

2. 日本語話者が「実際のコミュニケーション」にさらされる機会に限られる。「自然な出会い」にこだわらず、諸方法で補完すべきでは？

3. 日本語には「ストレス・アクセント」がそもそもないので、少なくともある程度の年齢がいった学習者がそうしたシステムを「認知」し理解するのは必要悪では？

(いずれも昔からある議論ですが…)

→平井、横内、佐瀬（2013）に先行研究のまとめ

◇発音・アクセント問題のスコアと「実際の」スピーキングのパフォーマンスとの相関が高くないので、テストの有用性に疑義、という研究あり（Buck 1989）。

→筆記によるアクセント問題が、スピーキングのパフォーマンスを測るテストではないのは当然では？スピーキングのパフォーマンスにはさまざまな別の要因がからむ。

→同一の学習者が、アクセント問題を経験した場合と、そうでない場合とで、どれだけ向上度合いが違うか、という視点を取るべきでは？

◇アクセント問題がどれだけ自分の発話能力を測っているか？というアンケートにどの程度の意味があるか？

「実際のコミュニケーション」へのこだわりから派生する問題（大津先生、p.14～）

1. 「実際の」の強調には一定の妥当性があるが、「現実」を模倣するというテストのスタイルを理想化するのではなく、相対化して考える必要もないか。

2. そもそもテストは「現実」とはかけ離れた人工的な場。

→ テストが「実際の場面に近い」というのはテストへの過信？

→ 「定番の現実」が頻繁に出題されるだけ？（TOEICなど）

→ 英語力とあまり関係のない無駄な「現実模倣」演出が増え、テスト（作問）に余計な負荷がかかる。

「実際のコミュニケーション」へのこだわり に内在する問題

1. テストそのものの「商業化」「消費財化」を示す？

→テスト形式の「フレンドリーさ」を誇示し、「商品価値」が高くなったように演出？

→テストの「過剰包装（＝過剰設定）」につながる。テストはシンプルであるべきでは？

2. 過度の「日常性信仰」のあらわれ？

→「現実に近い」「実用」という用語を介して、「あなたの役に立つ」「あなたの生活の一部」という「接近のレトリック」を駆使、英語力と乖離したところで消費者としての受験者をひきつけようとする？

3. 「アイスクリーム」や「遊園地のチケット」やスマホが生徒の日常の本質？実際には「友達がぐれて学校をやめた」「お父さんと2年くらい口きいてない」「コロナで学校にいけなくて悲しい」も日常。

4. テストが微温的なほどよい「日常」を素材にせざるをえないのは仕方がないが、たとえば「正義とは何か？」とか「哀しさと何か」といった抽象的な問題を英語で思考させるような問題文を出題することで、広く人間とかかわる諸問題をカバーしようとすることも大事では？

5. 4技能主義といいながら、会話中心になると「半径数メートルの日常」を柱にしがち。高校生は読解力のレベルではもっと奥が深いもの、広大なもの、抽象的なものも咀嚼できる。そうした設問がまったくないわけではないが、「半径数メートルの日常」への傾斜がはなはだしい。

→各自の「半径数メートルの日常」をテストで試すのは難しいので、個人的な実践を尊重する形にできないか？

6. そもそも学習内容やテストが（意図していないとはいえ）個人の「日常」を規定するという方向は望ましいのか？結果的に、「生活消費イズム」の押しつけにつながっているのではないか？

- 戦時下の日本では「新しい」という形容詞つきで、「日常」や「生活」のスタイルが国策として提唱される（大塚）
- 日常生活の工夫が提唱されるのも「近衛新体制が生活を介した「内面の参与」を国策実現の方法とするからである」（同39-40頁）

共通試験の「2技能化」の問題

＊詳細は

<https://webronza.asahi.com/authors/2020030200008.html>

・なぜ共通テストは「読解オンリー」型のテストになったのか？
単に発音、アクセント、整序問題がなくなったから、自然とそう
なったのか？それとも業者テスト方式にそろえるため？

「相関」の問題（大津先生p.16～）

◆発音・アクセントの得点相関が低い。

考えられる理由

1. 発音・アクセントは“英語力全体、とあまり関係しない？（廃止論者の意見？）
2. 文法力・読解力等とは別領域の知識とされがちだから？
3. 受験生があまり時間を割かないから？
4. ただし「自分は英語ができるはずなのに、不思議と英語がしゃべれない」といった実感の「不思議なことに」の部分の説明する可能性もある（「英語ができる」という実感との相関の低さゆえ、か）
5. 日本語話者の英語運用能力は本来的に「いびつ」になりがち？ 全体的な力（知的能力）と相関しない部分があり、そこが運用上のネックになる。（高い読み書き能力を持つ人が、まったく発音できないなどの例）
6. そもそも言語の諸技能・諸能力は「ばらばら」のあらわれをするという一般論につながる？

得点相関の低い問題例(大津先生、 p.21)

1. stone, story, total, voteの違いは、まさに日本語話者の泣き所。そこをテストに出さなかったら、一生誤解したまま。(カタカナ英語の影響大)
2. 典型的な「オレはできるはず」な人ができない部分。
「ちょっぴり英語力に自信のある人」がこうした要素をおさえていないために恥をかき、「学校英語のせいでダメだ」と文句を言うというパターンが繰り返されてきた。今回の改革も起点はそこ。

センター試験と民間試験の相関(大津先生、p.31；渡部先生、検討会議資料)

- もしセンター受験者の点数と、民間試験受検者の点数の相関が高いなら、そもそも「無理して入れかえる必要はない」につながる？
- 「諸テストが異なる能力をはかっている」という渡部先生の重要な指摘
- 渡部先生指摘の「公平性」は、相関の問題ともからむか。経済的要因や地理的要因に点数が影響されること（練習できないので）や、そもそも受検機会が制限されることを考えれば、民間試験の点数は、「実際の英語力」とは相関しないという考え方も出てくる。

「逆行列とは何か？」にこたえられない 学生たち（大津先生、p.33）

1. 翻訳、言いかえ、説明の重要性。

→「理解した内容を、自分の言葉で説明できるか」

2. 語学を学ぶことの意味とも関係。

→外国語を学ぶことで、システム間の横断や切り替えに頭が慣れる。

→他方で「スムーズな横断」や「透明な翻訳」はほぼ不可能で、必ずズレや失敗があることを実感し、対処する術も学ぶ必要あり。

→この「実感」を得るためにも、「本気の翻訳」の体験は必要。

3. 最終的には言葉がものをすべて表現・説明できないという現実にもつきあたる。（言葉≠もの）

民間テストの活用法と棲み分けの必要（渡部先生、p.7-）

まったく同意。追加で…

1. 過去問の処理。解答の開示。
2. 「測定」の正確さが絶対なのか？

～ 対策ありの「測定」は有効か。

3. 4技能にわけることよりも統合

～ 現実にはせいぜいアリのバイ的に「時間内に二つ」といった処理。

→読みながら音が聞こえる／聞きながら口の動きを追体験といったステップもありか

これと関連して、共通テストの「民間試験化」への疑念

1. リスニングテストの配点問題。杓子定規な均等配点に意味はある？

～ リスニングテストは洗練度が違うのでは？

- ・偶然による影響

- ・そもそも「実際」からは程遠い？ 疑似読解テストになる？

2. 映像を使うなどの改革の可能性は？

3. リスニング・テスト向けの練習では、十分な力は鍛えられないのでは？

～難易度の差は、「問題設定の複雑さ」に依存

一部テストに見られる「終身保障」(渡部先生、p.8)

- ・語学力は「右肩上がり」なのか？使わなければ、どんどん衰えるものではないか？
- ・とくに帰国子女

「間接的測定を視野に」

- ・賛成。
- ・実際にはあらゆるテストは「間接」的。「実際の」や「実用」は演出されたものにすぎない。（前出）
- ・テストへの過大な期待は禁物。

聴解テストを通した発音や文法の出題

- こうした形でのリスニングの活用に賛成。
- リスニングだけを切り分けるよりも、融合・統合させたうえで、他の技能と組み合わせる。
- 「興味」というファクターも重視する必要。
- 相手の顔も動きも状況もなしに、音だけに必死に耳を澄ますという状況は、「実際のコミュニケーション」ではまずない。

入試指導と言語運用能力指導を一貫させるべき（渡部先生）

英語のトレンドの変化（渡部先生、p.25）

- ・ 構造から機能へ（Chomsky→Halliday）
- ・ 高度な認知能力から日常英語へ
- ・ 明示性よりも暗示性

- ・ 一種のリベラリズム

- ・ 「日常英語」重視。「身の丈」主義。

→ 既出の「日常おしつけ問題」との関係

- ・ 実は格差拡大につながる？

→ 「日常英語しかやらせてもらえない」グループと、高度な英語に進む機会を与えられるグループ。

- ・ 「暗示性」への傾きをそろそろ反省的に振り返るとき？

→ 「説明」の効果も。

- 「暗示性」への傾きは、20世紀の半ば以降に顕在化した“即興信仰”ともつながる？

- 「その場の反応」に重きを置くコミュニケーション観
- 「無意識」に真実があるとするフロイト的人間観
- 「臨機応変で柔軟な対応」というプラグマティズム



- こうした世界観を絶対視せず、相対化することも必要？
- 実際の社会では、人はルーティンや準備のくびきから自由ではない。＝ “即興神話” は幻想にすぎない可能性

◆「いやしくも「言語」のテストである。ことばについて豊かな感性を育てる教育をしているのである」（若林他, 16)

→「感性」の話をするなら、「逸脱」や「破格」と標準的な言語運用との関係についても、どこかの段階で考えたい。高校生、大学生なら十分に可能。

(おまけ)

As you knew why
you took me for
just as well you knew

you I took, as you
could hardly, with
me if you offer

taken for anything
as I knew, you as
can lay on nature

deceived your friends

(from J.H.Prynne *Word Order* (1989))

君にもわかるようにどうして
君は私をそうとらえ
君が知っていてちょうどいい

君を私がとらえた 君が
ほとんどだめで 私と
君がいいと言え

何とでもなる
私の知っていたように 君は
自然に横たえるように

君の友達を裏切った

A CARAFE, THAT IS A BLIND GLASS.

A kind in glass and a cousin, a spectacle and nothing strange a single hurt color and an arrangement in a system to pointing. All this and not ordinary, not unordered in not resembling. The difference is spreading.

GLAZED GLITTER.

Nickel, what is nickel, it is originally rid of a cover.

The change in that is that red weakens an hour. The change has come. There is no search. But there is, there is that hope and that interpretation and sometime, surely any is unwelcome, sometime there is breath and there will be a sinecure and charming very charming is that clean and cleansing. Certainly glittering is handsome and convincing.

There is no gratitude in mercy and in medicine. There can be breakages in Japanese. That is no programme. That is no color chosen. It was chosen yesterday, that showed spitting and perhaps washing and polishing. It certainly showed no obligation and perhaps if borrowing is not natural there is some use in giving.

(from Gertrude Stein *Tender Buttons* (1914))

文献

- 大塚英志『「暮し」のファシズム 戦争は「新しい生活様式」の顔をしてやってきた』筑摩書房, 2021.
- 南風原朝和「共通テスト「英語」についての大学入試センター理事長の説明に対する意見—発音・アクセント・語句整序などを単独で問う問題を出題しない方針について—」, 2021.4.22.

<https://app.box.com/s/njpp9hiez7wxb1gh1e5xmvrhb6gbzu4l>

- 平井 明代, 横内 裕一郎, 佐瀬 文香「筆記による発音・アクセント問題の妥当性に関する包括的検証」日本言語テスト学会誌, 16号 (167 ~ 184頁), 2013年12月.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jltajournal/16/0/16_KJ00009158770/article/-char/ja

- 若林俊輔、根岸雅史『無責任なテストが「落ちこぼれ」を作る』大修館書店, 1993年.